愛知教育大学研究報告，34（人文科学編），pp. 99～115，February，1985

平林初之輔とその時代(4)——関東大震災前後——

渡　辺　和　靖

Kazuyasu　WATANABE

（哲学教室）

は　じ　め　に

飛鳥井雅道氏は，その「プロレタリア文学運動の時期区分」(『文学』昭和45年10・12月・46年2月，『日本プロレタリア文学史論』昭和57年・八木書店）において，雑誌『種蒔く人』の解体から『文芸戦線』の創刊へと至る時期について論じた際，『種蒔く人』同人間における，大正12年6月の有島武郎の死に対する評価をめぐって，次のように指摘している。

> 創刊以来のタネマキストがあとから加盟し，しかも日本共産党員だった青野らと，これほど違った反応を示したことは，注目に価する。イデオロギー的裁断は，一見だけでは初期タネマキストのお家芸だった。政治的にもボル派＝第三インターナショナルの旗を公然とかざしていた小牧近江たちは，しかし，おくれて参加し，非合法に結党された日本共産党に参加した青野李吉たちより，精神・感覚の点で，はるかにフレクシブルなものを捨てないでいたのだった。(前掲書42～3頁)

ここで「青野ら」といわれているのは，平林初之輔である。つまり飛鳥井氏は，『種蒔く人』同人内部において，小牧などの初期からの同人たちと，途中から同人となり日本共産党に所属した青野や平林のグループとの間に対立があり，それが運動を分裂へと導き，『種蒔く人』の廃刊へとつながったと主張するのである。

> タネマキストの中で第一次共産党に加盟し，有島武郎の自殺を冷酷に批判した青野李吉は，かつて勇ましかった平林初之輔とともに，当時の運動のいわゆる「リベツ化」[1]に完全に同調してゆくのだった。奇妙なエピソードだが，1923年（大正12）の秋，[2]つまり，関東大震災の戒厳令下の東京で『種蒔く人』同人が再建会議を開こうとしたとき，旧同人間で，一番政治的に強硬と見なされていた平林初之輔が，一度リベラルなところへ戻らねばならぬと主張しだし，リベツ化への口火を切ったという。青野李吉も同調した。(44頁)

さらに，飛鳥井氏は，平林のこの行動が「当時の党〔第一次共産党〕との事情があったよう」だとする小牧の発言をとりあげ，それは正しいだろうと肯定している。(45頁)

大正12年という年は，平林にとって，きわめて重要な時期にあたっている。大正10年初めにプロレタリア文学の論客として一気に論壇におどり出て，大正12年1月に『無産階級の文化』を出版し，名実ともに初期プロレタリア文学運動の理論的指導者となった平林は，9月の関東大震災を境として，前年入党した日本共産党からも脱落し，日本の自由主義の研究へと方向転換していった，といわれている。[3]

飛鳥井氏の見解を，このような平林の思想的軌跡のうちに重ねあわせると，なんとも「奇妙な」ことになる。「イデオロギー的裁断」をふりまわし『種蒔く人』を分裂へと導き，日本共産党との関係でも，その「リベツ化」を促進したまま，再建に関わることなく脱落してしまった――これでは，平林は，転向者どころか，裏切り者というイメージである。

大正12年における平林の動きについては，従来，「転向」という評価だけが先行して，まだ十分解明されていない部分が多い。飛鳥井氏の頭の中をも，「転向」という先入観が大きく支配していたのであろうか。氏の見解には，明白な誤りが含まれている。それを解きほぐすことによって，この時期における平林の思想の展開を跡づけていきたい。

(1) 有島武郎の評価をめぐって

飛鳥井氏は，平林を青野と同列におき，平林自身の有島に対する評価を検討しないまま，「青野ら」として一括している。このことの当否を判断するためには，なによりもまず，平林の有島観を明らかにすることが先決であろう。

平林の，有島に関する発言は，はやく，大正10年1月号『新潮』所載の「大正十年文壇予想」で，「通俗小説の文芸的位置」に触れた一節に見られる。その中で，平林は「有島武郎氏のある物が通俗だと言つたつて，それは決して，単なる通俗的意義を醸しはしないと思ふ。あの人が通俗だと言ふならいゝ意味で広く自由に首肯したいと思ひます。」(『平林初之輔文芸評論全集』――以下『全集』――下巻，498～9頁，昭和50年，文泉堂書店）と述べている。文学を「民衆」に近づけるという文脈で，平林は，「いゝ意味」での「通俗」として，有島を積極的に肯定している。

有島の「宣言一つ」が出たのは，それから一年後，大正11年1月号の『改造』であった。これに対して多くの人が意見を表明したが，平林も，『新潮』2月号の文芸時評「新年号の評論から」で，これに触れている。

「有島武郎氏の「宣言一つ」といふ「改造」所載の一文を私は興味をもつて読んだ読者の一人であることを告白する。」と書き出し，平林は，有島が，「階級的差別」を個人にとりつく「病気の遺伝」のように考え，自己がそれに属さぬものと断定している点を「機械的宿命観」であると批判し，「第四階級」とは歴史の中で動く生きたものであり，「歴史的必然」が自覚されるところに「指導者」や「前衛」が生まれると論じた。

平野謙の指摘するところによれば，有島の「宣言」は，平林の「第四階級の文学」(大正10年11月）を受け，「その立論をいはば絶望的に肯定した地点」で発せられたという。

> 『第四階級の文学』は「文化は階級を超越したものであるといふ仮定と，知識階級は階級を超越した「階級」であるといふ仮定と」を力強く否定したおそらく最初の文献だが，そのやうな「中間階級思想」否定を受けて，『宣言一つ』はインテリゲンツィア敗北論を主体的に提出したエッセイにほかならぬ。(平野謙「「政治の優位性」とはなにか」昭和21年9月，『戦後文芸評論』71～2頁・昭和23年・真善美社)

同じ年の3月，有島は『我等』に「片信」を寄せ，「宣言一つ」が「存外に人々の注意を牽いて，色々の批評や駁撃に遇ふことになつた」と述べ，堺利彦，片上伸，三上於菟吉らの名を挙げるとともに，「平林初之輔氏も簡単ながら感想を発表した。」と書いている。(『有島武郎全集』第6巻，368頁，大正13年，叢文閣)

同じ3月，平林は，『東京朝日新聞』の文芸時評「支配階級の分裂と知識階級」におい

て，階級闘争の激化とともに支配階級の一部がプロレタリアの陣営に投ずるようになると述べ，「有島氏の宣言」をその傾向の中に位置づけている。(『全集』下巻，130頁)

ところで，この有島氏の「宣言一つ」に対して，青野はどのように反応したか。大正11年5月，『読売新聞』に四回にわたって連載された論壇時評「知識人の現実批判」の第二回で，有島に触れて次のように述べている。

有島の最近の「言説」は，「ブルジョア思想家の観念的回避」の一例である。氏が「階級対立」から目を離さない点は「芸術プロパー党よりは一頭地をぬいてゐる」が，「社会組織の進行と共にダイヤレクチカリーに結集されてゆく」という現実を見のがし，「直ちにブルジョア対プロレタリヤを問題にして来たのでは，厳密に言つて現実的根拠を欠いた議論となつてしまふ。」(5月28日)

また青野は，平林らとともにこの4月に創刊号を出した雑誌『無産階級』の6月号（第3号）に，「有島氏の片目」と題する小文を載せて次のように書いている。

> 有島氏の考察は，知識人中の財産所有者のオルドルに属する人の考察で，(中略) 有島氏がその「悩み」の為めに，「土地」を棄てた時は，その等級から一級下つて来たのであるが，その時には既に戸に「有名」と云ふ労働用具が出来てゐたから，「土地」を所有してゐると大した差のないオルドルに止つたのである。(16～7頁)

平林も青野も，有島の階級観を非現実的とする点では共通するが，青野の反応は，はるかに辛辣である。平林の方には，有島に対するなにがしかの同情がほの見える。

大正11年9月，平林は，『早稲田文学』に「現下文壇の傾向について，階級の発見」を載せ，最近の文壇における「著しい出来事」として，「階級対立」が自覚されてきたことを挙げ，「階級としてのプロレタリヤの思想，感情，意志―― 一言でいへば意識があらはれてゐないと真にプロレタリヤの作品とは言へぬ。」と論じ，「氷のやうな冷い理性に潜熱を加へた作家が出現してきて，今日の社会をプロレタリヤの眼でくまなく解剖してもらひたい」と望んでいる。

この文脈において，平林は，「有島武郎氏のやうな大文学者が宙ぶらりの協調主義をやめて，鋭角的にプロレタリヤの陣営に投じてきたらどうだらう」と希望し，「河上博士のやうな有力な友人をもつてゐる有島氏の今後の左傾ぶり」を期待している。(『全集』下巻，157～8頁)

さらに，平林は，大正11年12月『解放』所載の文芸時評「文壇の一年間」において，有島に触れて次のように発言している。

有島は「宣言一つ」の発表とあい前後して，北海道にある農場を無償で小作人に開放したが，このことに触れて平林は，有島の行為に様々な批判があったことを認めつつ，「有島武郎氏が芸術家である以上，そこまで周到な用意の上に行動しなかつたことは，とがめるのが無理だ」と弁護している。[4)]

しかし，有島が『泉』という個人雑誌を発刊したことについて，平林は，「創刊の宣言のやうなものを読むと，しかし案外氏が今日の社会制度に対するオプチミストであることに驚かされる」と批判している。(同，544～5頁)

有島は，「『泉』を創刊するにあたつて」(『泉』大正11年10月) において，次のように書いている。

> この雑誌が幸にして存続の運命を荷ひ得たら，読者と私との親しみは，段々はつき

りして行くだらう。(中略) 読者間の友情も亦実現されるだらう。若し，かくの如くして実現された友情が，何等の規約も，束縛も，虚礼もなく，平等な関係に於いて深まつて行くならば，その数は縦ひいかに少なくとも，そこには一つの世界が創り出されるだらう。(前掲『有島武郎全集』第7巻，190頁)

有島の個人的な善意に十分敬意を払いながらも，そうした個人と個人の友情がストレートに「一つの世界」を形成しうると考える有島の発想を，平林は，楽天的であると批判するのである。

ちょうど同じ12月に『我等』に掲載された，竹内仁の「リップスの人格主義に就て」の中に，「凡そそれが人格価値の実現に関する限り，あらゆる社会問題を解決することは，社会を構成する各人の義務である。」(『竹内仁遺稿』25～6頁，昭和3年，竹内仁遺稿刊行会) という一節がある。竹内にとって，人格の実現は，個人の善意の問題ではなく，社会制度の問題に他ならなかった。

同じように，平林にとっても，「社会制度」の問題を無視して，個人の善意によって新しい世界を創造しようとする有島の立場は，空想的なものでしかなかった。

さて，有島の死に際して，平林はどのような感想を持ったか。大正12年8月号の『改造』に，平林は，「有島武郎氏の死について」という文章を発表している。

平林は，まず，「死といふ行為は，個人の行為としては最終的，絶対的の行為だ。それに対する第三者の批判や，分析は全然無意味に近い。」「その人にして見れば，それは，凡ゆる批判を超越した絶対行為であるに相違ない。これを批判すべくペンの力はあまりに無力すぎる。」と一般論を述べた上で，有島の死に接したときの印象を次のように記している。

我々は，日常生活の中で見知らぬ人々の死を平気で通りすぎてしまうようになっているが，突然，身近かな人の死によって，その「平静」を失ってしまう。「今度有島氏の情死の報を見た時にも私は，石のやうに硬くなつて，悲しみとか，驚きとかいふやうな感情さへ起つて来る余裕がなかつた。」

さらに平林は，有島を，「日本で有数の文豪」であり「私の最も尊敬してゐる小説家の一人」であるとし，

特に，最近，社会問題の怒濤が日本に押しよせて，思想界が混乱をはじめた時，氏は，身を挺して此れが解決にあたつた。さうして，氏の思索の方向が漸次大衆の動く方向と合致せんとする時，突然今度の事件が起つたのである。

とつづけ，その死が「ショッキングであつた。」と述べている。

最後に平林は，「冷静な頭脳が，狂熱的恋愛を分析することはできぬ。」として，次のように結論する。

唯物史観の信奉者である私は，それだけの材料さへあれば氏の心の中にうづまいてゐたと思はれる苦悶の社会的意義を分析することはできる。けれども有島武郎といふ一個人の行為に歴史的必然や，それに類似するロジツクを発見することはできぬ。更にこの超倫理的行為の倫理的価値を決定することは尚更らできぬ。たゞ，有島氏の立場に身をゝいて，氏の苦しみであつたらう所の苦しみを想像して見ることができるに止まる。(『全集』下巻，197～202頁)

ここには，有島の死によって激しくゆり動かされている平林の姿がある。その文体すら，

『無産階級の文化』のそれとくらべて，大きく変化している。

かつて，平林は，有島の文学と行動に相当の敬意を示しながらも，それらを階級闘争という歴史的必然のうちに位置づけようとした。しかし，今や，そうした「唯物史観」の立場は背後にしりぞき，「因襲道徳の鉄壁」（201頁）に対して死をもって反抗した有島の「全人格的」「真理探究的」（203頁）な生き方への深い同感が前面にせり出している。

このような平林の反応は，青野はもちろん，飛鳥井氏が「フレックシブルな感覚」を持っているとした，小牧近江や今野賢三・佐々木孝丸とも，まるで異なっている。

この点を明らかにするために，まず，大正12年8月号『種蒔く人』の有島武郎を追悼する小特集を，少し詳しく分析してみよう。

そこでは，最初に，「種蒔き社」の名前で「吊辞」が掲げられ，有島の「全人格的」な戦いに対する尊敬と，運動への理解と援助に対する感謝とが表明され，同時に，「いま一歩，プロレタリヤ運動に踏み出してくれなかつた無念さは，はかり知れない。」「願くば氏が，その否定の心境から，最う一歩勇敢に，肯定へ進んで欲しかつた。」という，「プロレタリヤ文芸運動」の立場からする不満が記されている。（122頁）

ここに示された，「一般的にいったら心情的に非常に惜しいということ，われわれの陣営の一歩手前まで来ていたのにというような」（猪野謙二『座談会大正文学史』165頁，昭和40年，岩波書店）受けとり方は，その他の追悼文の基調ともなっている。

今野賢三は，「故き有島先生と自分」という追憶文で，有島との個人的なつきあいを深い感動をこめて語るとともに，最後に，「先生を個人主義的立場から見れば，今回の死は徹底的に違ひない。しかし，私の求めたのはさうではなかつた。」「その自己のぶちこはしから，新な建設と，光明へむかつての自己肯定へすゝんでほしかつた。」（125～6頁）と，その無念さを吐露している。

小牧近江と佐々木孝丸の文章は，ごく短いもので，有島についての印象を述べたものであるが，あらわにではないが，そこにも，例えば「『これからこそ！』と云ふ期待」（128頁）というような表現のうちに，有島のもう一歩の前進を願う心情が示されている。

これらの文章が，イデオロギーによって有島の死を裁断しようとする立場と無縁であることは，飛鳥井氏の指摘する通りである。しかし，それらが，有島にもう一歩の前進をひそかに期待していることを忘れてはならない。

つづいて，青野の反応に眼を移そう。青野の「有島氏を死に導いたもの」は，大正12年8月号『解放』の「有島武郎氏の恋愛死」と題する特集に，山川菊栄，秋田雨雀，麻生久，新居格，白柳秀湖，山川均らの文章とともに掲載された。

> 氏のこれまでの行為は，ブルジョア生活者としての殻をぬがうとして焦慮した結果であるは言ふまでもない。しかしその十分でないことは常に氏を苦しめてゐたであらう。特に氏の如く，新興文化の到来を強く認識するの聡明を有した人にあつては，そのことは運命的な圧力をもつて，自身を悩ましたにちがいない。（中略）何ものをもつても救はれなかつた氏は，恋によつて救はれた。尠くとも氏自身はさう感じた。その絶頂が死であつた。その瞬間の氏には，最早や何ものもなかつた。自分を生かさう，自分を救はう，その一念にのみ導かれた氏は，遂にそのことの為めに死んだのである。それは最も正直である。然しそれが余りに自我的であり，個人本位的であるところが，私たちの到底その死を讃美出来ぬ所以である。（171頁）

ここには，有島の死に対する深い理解と同感がある。これを，飛鳥井氏のように，「有島武郎の自殺を冷酷に批判した」と一蹴することは正しくない。そのような評価は，むしろ，同じ号に載った，山川菊栄や麻生久などの文章にこそふさわしい。青野が末尾で有島の個人主義を批判しているのは，さきの『種蒔く人』小特集が，有島に深く同情しつつも，もう一歩の前進を願ったのと，ほぼ同じ心情を示したものと見ることができる。

いずれにしても，青野と他の『種蒔く人』同人を区別する決定的な違いは存在しない。これに対して，青野を含めて『種蒔く人』同人の多くが，プロレタリア文学運動へのもう一歩のコミットを求めて，有島の死になにがしかの不満をもらしたのに，平林が，有島の死に一切の分析と評価をさしひかえた態度は，孤立的といえるまでにきわだっている。

山川均は，さきの『解放』の有島特集に掲載された「社会葬と恋愛葬」の中で，おそらく平林のこの態度を意識しながら，

> 或人は，有島氏の死は批評を超越して居ると語つた人がある。有島氏の三通の遺書を読んだなら，何人と雖も有島氏の行動を批判するに忍びない。この意味に於て，有島氏の死は批評を超越して居るとも云ふことができる。

と述べながらも，有島の死に特別の意味を付加することを否定し，「外界の条件と圧迫との為に殺されたすべての自殺者のうちで，最も不本意に死んだ自殺者の死と決して異つた死ではない」と断言している。(『解放』大正12年8月号，185頁)

平林にとって，有島の死は，他の『種蒔く人』同人や，山川均とはまったく違った，固有の意味を持っていたように思われる。そこには，平林の思想を大きく転回させる契機がかくされていたように思われる。この変化を，当時平林と最も親しく交わっていた青野は敏感に感知していた。青野は，その「平林初之輔論」(『新潮』昭和6年8月号）で，この時期の平林について，次のように証言している。「「一つの宣言」当時には故有島武郎の所説に彼は敢然と反対したものが，この時期には「有島の言つたことにも本統の点がある。」としみ〴〵言つてゐた。」(28頁)

(2) 一つの矛盾——科学と文学

平林は，盛んにプロレタリア文学論を提起していた時期，大正11年4月，金子筑水監修による新学芸講座の第一編として『科学概論』(春秋社）を執筆している。[5)]

この中で，平林は，主にポアンカレの理論に依拠しながら，現代科学の水準を叙述している。ここでは，平林の見解がたんてきに示されている第八章と第九章をとりあげて考察したい。

「第八章　科学と文明」で平林は，まず，「一、科学と物質文明」において，科学が「近代生活の中心問題ともいふべき産業方面」に及ぼした驚くべき影響について叙述し，つづいて，「二、科学と精神文明」において，科学が，宗教を征服し，「神学を精神界の帝王たる地位から引きづりをろし，その上に理性をうち立てた。」ことを示す。ただし，平林は，ここで次のように言う。

> けれども理性を以て説明し得る限界に常に反理性が仮定される。(中略）吾々は合理的知識の限界を益々拡げてゆくことはできる。けれども遂にこれを撤廃することは出来ないのである。(中略）かくして吾々は重要な真理に到達したやうに思はれる。科学と宗教とは天上と地上に入り乱れて争闘すべきものではなくて，各々一定の限界に踏

み止るべきものだといふ真理である。(66〜72頁)

「第九章　科学の価値」に入って，平林は，「一，科学の為めの科学」において，直接有用であろうとする実用的知識よりも，原理を探究する科学が，かえって人生に役立つことを明らかにし，「二，科学の限界」において，科学が一切のものを解決するとする「科学万能論」をしりぞける。

科学的認識はその有効範囲が無限ではなくて限られた範囲内である。しかも人間の精神活動は科学の基礎となる知識作用のみに限られてゐない。その他に感情及び意志の作用がある。そこはまた科学とは別天地である。芸術，宗教，道徳等の世界がそこに展開される。

最後に，平林は，「三，科学の客観的価値」の節をもうけ，ポアンカレを引きながら，「客観性」とは「多くの人々の精神に共通」なものであり，「他人に伝達され」るものである。ところで，「感覚」は「永遠に閉された世界」であり，他人に伝達できない。しかし，「感覚間の関係」は他人に伝達することができる。「性質の無い純粋の関係」こそが「客観的価値」を持つ。科学とは「関係の体系」に他ならない，と論じている。

事物間の関係こそ唯一の実在であると言へる。一言にしてつくせば，唯一の客観的実在は事物間の関係である。世界の調和はこゝから生ずる。此の関係，この調和はもとよりこれを思考し，感知する精神を離れて理解することはできぬ。けれどもそれは現在も将来も凡ての思考者に共通だから客観的なのである。[6](75〜84頁)

以上に示された平林の考え方の特徴を要約すれば，次の二つにまとめられよう。

① 科学と芸術（及び宗教・道徳）は，互いに独立しつつ並存するという二元論。

② 科学は，事実に対して思惟（理性）が与える関係であるというカント流の認識論。

まず，②について言うなら，平林のマルクス理解の根底に，このような考え方がはっきりとふまえられていることを指摘しておく必要がある。平林のマルクス理解の特質については，別のところで既に論じた。[7]「唯物史観と文学」(『新潮』大正10年11月）などに示されたそれは，一言でいえば，閉鎖的な体系ではなく，経験や事実に対して開放された方法であった。

しかし，さしあたりここで問題になるのは，①である。「芸術の永遠」を否定し，芸術を「社会改造」のうちに位置づけ，「吾々の祖先が遺した価値ある芸術をも一切あげてこれを破壊の熔炉に投じなければならないのだ。」(「民衆芸術の理論と実際」『新潮』大正10年8月，『全集』上巻 25〜6頁）と主張する平林のプロレタリア文学論は，あきらかに，科学（＝マルクス主義）[8]と芸術の二元論を主張する『科学概論』の立場と矛盾する。

この矛盾を突いたのが，本間久雄の「最近の文芸批評壇」であった。大正10年12月号『早稲田文学』所載のこの評論で，本間は，「荒涼落寞たる批評界」において「最も鮮やかな活躍振りを見せた」一人として平林の名を挙げ，さきの発言をとらえて次のように論じている。

君は既存の芸術を何と考へてゐるか。これを破壊し去る事に何等の哀惜も感じないか。もし感じないならば破壊的な君の態度は正しいが，併し君の鑑賞眼は疑はねばならない。けれども実際の君は既存の芸術に対してさう迄没批判的ではない筈である。(君のその点に関しては，私は最もよく知つてゐる者の一人であると自任するが）……とすれば君は自分の既存芸術に対する鑑賞なり，批判なりを殺して，現状破壊の宣言

をしてゐるので，そこに君の議論の危険が潜んでゐると思ふ。（9頁）

本間の指摘は，単に，平林のプロレタリア文学論の内部にひそむ矛盾を鋭くついたばかりでなく，平林の内部にある理論的な矛盾をえぐり出した。「宗教も文学も道徳も大部分支配階級が民衆を釣らうとする餌だ。」（前掲「民衆芸術の理論と実際」19頁）というような，マルクス主義によって文学を一挙に裁断してしまう立場は，科学（＝マルクス主義）と芸術の相対的独立を主張する二元論の立場とは適合しない。

また，同じ「民衆芸術の理論と実際」の中で，平林は，「今日日本の民衆が辛うじて近付き得る芸術」として「活動写真」をとりあげ，「大抵の活劇，探偵物，社会劇等がすべて財産権の神聖を極度に主張したものである。」という理由から，すべて「ブルジョアの宣伝の道具」となっていると批判している。（21～2頁）こうした評価の仕方は，科学（＝マルクス主義）と芸術の二元論と矛盾するばかりでない。単にとりあげている題材の内容から映画全体を否定するやり方は，後に映画の持つ固有の手法と近代芸術との関係を先駆的に分析することになる平林[9]には，いかにもとってつけたような感じがする。

さらに，大正11年に入って，平林のプロレタリア文学論は，かつての盟友[10]木村毅によって，その内部矛盾を深々とえぐられることになる。大正11年9月，木村は，『新潮』所載の文芸時評「宗教のために弁ず――川路，平林氏等の所論に対して」において，前月号の同誌文芸時評「ジヤアナリズムと文学」で，平林が筆をすべらせて，

> 宗教から不当な神秘を一切除去し，直接に現実生活と交渉のあるものとしなければならぬ。その結果として宗教が消え去つてしまうなら，それはもう使命をはたして必要がなくなつてしまつたのだから少しもをしむに足らぬ。（『全集』上巻　61頁）

と書いた部分をとり上げて，次のように論じた。

> 私は自分の心生活を振返つて見て，少くとも宗教の基本的な特相が左の点に存する事を信ずるものである。即ち，先づそれは既知の世界と未知の世界とを分つ事だ。常識と神秘とを分つ事だ。そして此の境界線に立つて既知から未知の方へ，常識から神秘の方へ自分の生活を拡大して行く事だ。（中略）君と僕とは神秘の介在を容すか容さないかの一点で，相争ふか，相別れるかしなければならない。私はかかる事に際会する度に，お互に心的閲歴を異にし，精神的経路が違つてゐる事を寂しくも，悲しくも思ふのである。（中略）平林君の言ふやうに神秘を一切除去すれば恐らく宗教は消えて道徳のみが残るであらうが，私に言はせれば，不当なる神秘は兎も角，一切の神秘を除去して了ふ事は到底出来ない。成程科学の進歩は精霊，悪鬼，妖魔等を悉く駆逐し，星を神の眼なりとし，碧空を天の宮居の床なりとする妄想を打破した。ニュートンやアインスタインの発見は天体に関する原始宗教的迷信を一切払拭して了つた。が，それと共に神秘もなくなつて了つたであらう乎。否，一つの神秘を解けば，十の新らしい神秘が生れて来る。科学は天の宮居の迷信を打破したが，その代り今度は無限大に拡がる宇宙に永遠に持続する森然たる秩序が，前の迷信よりも遥かに大きな神秘となつて，吾々に驚異の眼を見張らせてゐる。（93～4頁）

木村の批判は，平林の内部にわだかまる矛盾を，鋭く刺しつらぬいた。最後に「これらの考えを僕は平林君の『科学概論』から学んだ」とでも付け加えておけば，木村の批判はさらに強力になったであろう。というのも，ここで木村が展開していることは，既に見たように，平林が数ケ月前に『科学概論』において「科学の限界」として主張したところで

あるから。木村が批判の対象とした立場は，平林自身が「科学万能論」として否定したものに他ならなかった。

平林のプロレタリア文学論は，大正10年の初め，文学の内在的な批評原理を一挙に越えるものとして「社会的正義」という根拠を提示したとき，ほぼ確立した。[11] しかし，それは，自然主義によって占拠された文壇に対して，主観の構成力と社会的視野を要求する平林のロマン主義のモチーフの全部を引きつぐものではなかった。それどころか，「社会改造」の問題が正面にせり出してくることによって，新しい文学の創造を求める「文学革命」[12] の問題は，かえって平林の視野からこぼれ落ちてしまうことになった。

こうした事情は，青野季吉によって，逆の視点から確認されている。青野は，『種蒔く人』大正12年6月号所載「創作・翻訳・詩」で，平林の『無産階級の文化』をとり上げ，次のように述べている。

> これは平林君の数年来の努力の結晶で，いまさらどうかう云ふ必要のないものだ。この集で私たちが非常に興味を以つて見る事実は，平林君の視野が社会的に拡大すればするほど，「芸術」から一歩づつ脱却してるといふ事実だ。そしてその「拡大」と「脱却」とが，飛躍でなしに地味な歩みであるところに，また私は心がひかれる。(374頁)

社会的に視野が拡大すればするほど，芸術からは一歩づつ後退しなければならないという事態は，青野にとっては歓迎すべきであったかもしれないが，平林自身にとってはどうであったろうか。むしろ，平林の内面においては，社会的視野が，しだいに芸術にとって桎梏となっていくというようなことはなかったであろうか。

本間久雄や木村毅の批判は，平林の思想に孕まれたそうした矛盾をあらわにした。そして，有島の死に際して平林が直面させられたのも，それであった。

(3) プロレタリア文学論の再建へ

大正12年1月刊の『無産階級の文化』に収められた諸論稿においては，階級闘争の一環としてのプロレタリア文学という立場が前面に押し出されて，芸術に固有の問題は，ほとんどとり上げられていない。しかし，同じ大正12年1月に『解放』に発表された「日本文壇の前景　私の知り得る範囲」になると，平林は，自覚的にその問題と取りくんでいる。

「文芸作品は個人の産物であります。」と平林は書き出す。個人の問題は，「科学」とはならない。ところが，「個人の集つた社会」になると「一定の法則」に支配される。「個人は自由である，法則に支配されない，併し社会は必至の道を進む，必至の法則に支配される」。この意味で，文学も，また，全体として一定の「方向」を進む。ここに，文学の「歴史的価値」が存する。「階級戦争の戦場にたつてゐることを自覚した人が，所謂芸術的価値よりも歴史的価値を強調するのは当然です。」(『全集』下巻164～6頁)

ここで平林は，「歴史的価値」と「芸術的価値」という概念[13] を提起することによって，プロレタリア文学の新しい位置づけを試みている。そこに，単純に政治の優位を説いていた従来の立場への深刻な反省が介在していることは明白である。平林は，科学（＝マルクス主義）と芸術の二元論という本来のモチーフをふまえて，プロレタリア文学の新しい理論を構築しようと努力しているのである。しかし，ここでは，「歴史的価値」と「芸術的

価値」は「対立するもの」であるが，「「芸術一般」も亦歴史的観念に過ぎない」（166頁）というように一元化される傾向が強い。

この二つの概念は，同じ大正12年1月，『読売新聞』に連載された文芸時評「無産者文学のために」でもとり上げられている。「文学作品には歴史的価値と芸術的価値との二つの価値が含まれてゐます。」「歴史的価値」は「時代時代によりて変るもの」であり，「芸術的価値は各時代を一貫してゐる」。両者は完全に「独立」したものではなく，「芸術的価値は歴史的価値によりて絶へず修正されてゐるのです。」（同172頁）

平林が，文学の「歴史的価値」という視点を持ち出したのは，その最初の意図からすれば，「芸術の本質」を「永遠」のものと信じる「無邪気な芸術家達」（172頁）を批判するためであった。しかし，そのことは，同時に，「芸術の本質」について考察することを，平林に強いる結果となった。

大正12年5月号『新潮』所載「釈明，弁駁及び啓蒙」において，平林は，プロレタリア文学に対して投げつけられた様々な批判への反論という形をとって，大胆に，マルクス主義と文学との関係について議論を展開した。

平林は，まず，マルクスの「社会主義」とダーウィンの進化論が，まったく「独立」した理論であることを明らかにするところから始める。「生物進化論は生物界の現象にのみ妥当であり，社会進化論[14]は社会現象のみに妥当である。社会進化論を打ちたてる為めには，その出発点として，社会そのものゝ独立の研究，解剖が絶対に必要である。」「マルクス主義」は「進化論の延長」ではない。それは，「ブルジョア社会の直接の解剖」から出発する。

このように論じたのち，平林は，文学の問題へと移っていく。「文学と社会とは全然別箇の対象である。」だから，文学のうちに「階級闘争」を見るということは，「社会現象の理論を文学にそつくり移さう」と企てることではない。

> たゞ今日の社会の文学を今日の社会の文学として見ようとしてゐるだけである。重力の場で空間が歪むやうに，ブルジョア社会でゆがんでゐる文学のゆがみを測定せんとしてゐるだけである。階級闘争のものさしを個々の文学作品にあてはめようとしてゐるのではなくて，文学のゆがみを測定すると階級闘争がでゝ来るのである。たゞそのゆがみをどこから測定するといふ立場がゆがみの最もよく見える無産階級の立場であるといふだけである。（182～6頁）

ここに示された，「無産階級の立場」こそ，「ブルジョア社会でゆがんでいる文学のゆがみ」を最もよく測定しうる視点であるという発想は，かつて，ロマン主義の主張において，習慣と常識によってぬりかためられた「現実」を破壊し「真理」に立脚しなければならないとした[15]平林のモチーフを，はっきりとすくい上げ，さらにしっかりした具体的な土台の上に再建するものであった。

平林が，それまでの自らの立場を反省し，科学（＝マルクス主義）と文学の相対的な独立を認めた上で，プロレタリア文学の新しい土台構築をめざして，両者の内在的な結びつきを求めて模索していった時，彼は，これまで棄ててかえりみなかった，ロマン主義のモチーフに再び出会うことになったのである。

つづいて，平林は，社会主義において実現される精神に説き及び，青野季吉が『解放』3月号所載「芸術の革命と革命の芸術」で論じた「コムレードの精神[16]」をとり上げ，新社

会においては，「ブルジョア文化の枢軸を構成する個人主義の精神」に代わって，「コムレードの精神」が支配するであろうと述べ，次のように論じている。

> コムレードの精神は在来の社会の階級観念に代るものであり，個人主義に代るものであると同時に，それより生じたあらゆる道徳に代るものである。主従の関係，師弟の関係，友情，更にすゝんでは肉親の関係さへも新しい社会では解体して，コムレードシツプの普遍道徳の上に新しい面目を帯びて再建されるであらう。

文学が「階級闘争」に関わるのは，単にその「題材」によるのではない。その「精神」の全体において関わるのである。「コムレードの精神」が「プロレタリヤ文学の骨髄」である。（187～90頁）

ここで平林が，「コムレードの精神」を強調するのは，「何から何まで頭ごなしに否定してそれつきりの思想や，金持の面さへ見ればぷり〳〵怒つて見るやうな脆弱な感情」（190頁）に捉えられた従来のプロレタリア文学への不満と同時に，社会現象の理論としてのマルクス主義が文学の場面にどのように具体化されるかという問題意識に導かれたものであるといえる。

最後に，平林は，プロレタリア文学運動の任務について，次のように述べる。「従来吾々の仲間は哨兵が通人を誰何するやうに，誰彼となく「敵か味方か」といふ誰何を浴せるのを常とし，「味方だ」と言へば安心したものだ。」しかし，今や，こうした「時代おくれ」のやり方を脱皮して，「直ちに第二歩を踏み出さねばならない。」

ブルジョア文学者にとっては「作品をつくること」がすべてだが，プロレタリア文学者は「少くも一つだけ余計の仕事を分担せねばならない」。つまり，「我等にとつては，一般無産階級解放運動との緊密な連絡が必要である。」（190～1頁）

確認された結論は，無産運動との連帯であり，「階級の立場」に立脚することである。これだけをとって見れば，『無産階級の文化』の時点と，ほとんど変化はないとしなければならない。しかし，ここでは，「プロレタリヤ解放運動」と文学とは相対的に独立したものと考えられた上で，両者の結合が問題にされているのである。明らかにそれは，例えば「階級の対立といふ事実が必然に文学の階級的対立を来すのである。」（「第四階級の文学」『解放』大正11年1月，『全集』上巻 41頁）という立場からは，はるかにへだたったところにあるといわねばならない。

ここで，問題を，① 「プロレタリヤ解放運動」自体に対する平林の立場（社会に対する認識），② 平林自身の内部における科学（＝マルクス主義）と文学の関係（文学に対する認識），の二つに区別して考察する必要がある。

まず，①から考察しよう。この点でいえば，平林の「釈明，弁駁及び啓蒙」が，大正11年8月，『前衛』に発表された，第一次日本共産党の指導者である山川均の論文「無産階級運動の方向転換」の方針にそって執筆されていることは疑いない。それは，「第二歩」という言葉使いのうちに明白に示されている。[17] 伴悦氏が指摘するように，この時期平林は，山川の方向転換論の枠内にいたといえる。[18] とりわけ，大正12年5月号『赤旗』所載の「戦線をつくる必要」は，方向転換論を具体化すべく，「労働者の組織と共に此の組織された労働者の意志を代表する政党をもつこと」の必要性を論じたものであった。（『全集』下巻 722頁）

藤井真澄は，大正11年7月号『新潮』所載の文芸時評「新進プロレタリヤ作家及評論

家」の中で，当時平林が，「小山川」あるいは「山川の弟」と呼ばれていたことを証言している。（110頁）

いずれにしても，社会に対する認識にかぎるなら，大正12年5月の時点で，平林は従来から一貫した態度を保持している。そして，その姿勢は，彼が，関東大震災以前に書いた最後の論文，『解放』9月号所載の「新聞の社会的機能」にも一貫している。その中で，平林は次のように論じている。

> 一九二三年にしては嘘のやうな話だが，労働組合が公認されてをらぬ国，無産階級の政党が公認されてをらぬ国，共産党の共の字の影がうつゝても物々しい大検挙をはじめる国，社会主義の文書の公刊が殆んど許されてをらぬ国，無産階級（及至は中間階級のでさへも）の集会，演説会が全然許されぬ国，さうして，実力に於て世界で一，二を争ふ陸軍と，世界第三の海軍とをもつて，それでも猶ほ足りないで軍隊の民衆化に夢中になつてゐる国には無産階級の日刊新聞のない事などは，当然過ぎる事かも知れぬが，世界全体を見渡すと，むしろ，かやうな国は現実の国家といふよりも，考古学の国家のやうな気がする。（『全集』下巻　732～3頁）

このことは，平林が，例えば，大正12年6月5日の第一次日本共産党の大検挙事件におじ気づいたとか，或いはその他の政治的な理由によって，この時期「転向」したというような事実はなかったことを示している。否，この時期のみならず，関東大震災以後も，社会に対する認識においては，一貫していたといえる。

従って，社会に対する認識だけを追っていたのでは，この時期の平林の思想の微妙な変化を看取することはむずかしい。伴悦氏が，この時期の平林の文章にかつての「エネルギッシュな感じ」が消えていった，と正しく観察しながら，その意味を十分洞察しえなかったのは，そのためである。[19]

ここにおいて，先に挙げた②の問題が重要性を帯びてくる。平林は，社会と文学とが，相対的に独立しながら結合するというメカニズムの複雑さを，しだいに自覚しつつある。当然ながら，そこには，社会現象とは独立した，文学に固有の構造が解明されなければならないという認識が前提されていた。社会に対する認識において一貫しながら，文学に対する認識において，平林は，しだいに以前の立場から離れていくことになる。

大正12年6月号『早稲田文学』所載の「新興文壇の収穫――前田河広一郎氏「赤い馬車」を読む」において，平林は，「彼は或る人達に言はせると，芸術なんかありさうにもない，産業主義と煤煙とアルコールと煉瓦と煙突との中に，剛健そのものゝやうな芸術を打ちたてようとしてゐる。そして，おまけに打ちたてゝゐる。」と，前田河の作品を評価している。（『全集』下巻　196頁）

これは，現代の都市文明のうちに新しい美を創造していくという，平林のロマン主義のモチーフ[20]を，ここで再びとり上げたことを示している。平林が，文学の手法の問題に，深く心ひかれていることを見ることができる。

そして，有島武郎の死。大正11年6月9日のことであった。

既に見たように，平林は，「有島武郎氏の死について」（『改造』大正12年8月号）を書いて，深い哀悼の意を表した。その中で，平林は，「唯物史観」は，有島の「苦悶」の「社会的意義」を「分析」することができるだけで，その「歴史的必然」や「倫理的価値」を決定することはできない，と断言した。

この発言を，大正12年の初め以来，平林の心を捉えはじめた，文学の相対的独立という文脈のうちに位置づけてみたとき，それが決定的な意味を持つことがわかる。有島の死は，文学と社会との相対的独立をふまえつつ両者の結合を模索するという，プロレタリア文学論再構築の可能性を完全に打ちくだいた。関東大震災を待たずに，平林の方向転換は，この時点で決定されたのであった。

かくして，大正10年3月[21]以来，約2年半にわたって展開してきた，平林のプロレタリア文学論の時代は，終ったのである。

おわりに

関東大震災後の混乱を収拾するために開かれた『種蒔く人』同人による再建会議で，平林が重要な役割を演じたことは，つとに知られている。

昭和11年10月号『人民文庫』の座談会[22]において，この会議が，大正12年12月，代々木八幡の料理屋「平野屋」で開かれたことを，金子洋文と青野季吉が確認している。[23]
(『日本文学研究資料叢書　プロレタリア文学』285頁，昭和46年，有精堂)

同じ座談会で，金子洋文は次のように発言している。

> そのときに平林初之輔が，吾々の運動は自由主義から初めなきやならないといひだしたんだよ。これは非常な問題だつたんだ。吾々は間違つた，吾々の運動はもう一遍自由主義へかへつてやらなきやいけない。――之にまづ暗黙の反対したのが小牧さ。(同)

金子の発言は，佐々木孝丸によって，「平林の自由主義からスタートすべしといふ議論に対しての小牧の意見は人権擁護といふやうなことがあつたと思ふ」(同，285～6頁）という形で確認されている。

平野謙は，おそらくこれらの発言をふまえて，「平林初之輔のこと」(『政治と文学の間』昭和31年，未来社）で，次のように論じている。

> 大正十二年の暮に，旧「種蒔く人」同人が集って，その再建を協議したが，その席上平林は再建に批判的であり，共産党もふくめた従来の運動方式に否定的だったという。(中略）平林は日本のブルジョア民主主義の未成熟を指摘し，民主主義・自由主義の再検討から出発すべきである，という意見だった。彼はその見解を裏づけるように，大正十三年四月『日本自由主義発達史』を刊行した。(213頁)

平野の見解は，その後の平林の動向を読み込みすぎているようにも思われるが，同時にそれが平林の思想の流れを無理なく説明することができることを示している。

問題は，先の座談会にたまたま欠席した小牧近江が，戦後になって，平林の発言を，第一次共産党の解党問題と結びつけたことである。まず，金子洋文が，『文学』(昭和38年7月号）の青野季吉特集号に寄せた「青野季吉の人間像」の中で，「さいきん小牧近江からその間の事情」を聞いたのだが，「平林の発言は，震災後における，日本共産党の運動方針を伝えたもの」である，と述べた。(34頁)

これを受けて，平野謙が，『座談会大正文学史』(前掲）の中で，「金子洋文の回想によりますと，つまり山川均などの意見でそういう平林の発言もあ」ったというが，これは「初耳だった。」と語っている。(543頁)

そして，昭和40年9月刊の『ある現代史――“種蒔く人”前後』(法政大学出版部）の中

で，小牧近江自身が次のように書いている。『種蒔く人』の再建会議が開かれたとき，「そこでは，“種蒔く人”のいままでのあり方が強く批判され」「“自己反省論”が強く打ち出された」が，「それを切り出したのは平林初之輔でした。」「平林発言は，当時の党との事情があったようです。」（102～4頁）

小牧の主張には，根拠が示されていない。しかも，この点については，青野季吉に次のような証言がある。「党が崩壊し，震災直後，その再建が企てられ，私が彼を訪ねて意見を求めた時，彼はほとんどその再建に意見を提出することすら，欲しないかの如くであつた。」（前掲「平林初之輔論」28頁）

青野の証言は，平林の死の直後であり，小牧の主張は，四十年以上もたってからの回想である。平林の発言の背後に党の意向があったという主張は，にわかには信じがたい。

とはいえ，既に見た平林と山川均との深い関係を考えれば，両者の間に，小牧の推測を引き出すような，なんらかの意志の疎通があったかもしれない。

しかし，この小牧の主張を論拠として，『種蒔く人』再建会議における平林の発言を，第一次日本共産党の解党問題と結びつけ，平林を「リベツ化」＝日本共産党の解党への急先鋒であるかのように論ずる飛鳥井雅道氏は，明らかに間違っている。[24]

この時期における平林の政治的立場を考える上で，きわめて重要な視座が，岩村登志夫氏によって提起されている。岩村氏は，「日本共産党成立と猪俣・鈴木グループの役割」（『人文学報』昭和47年，『コミンテルンと日本共産党の成立』昭和52年，三一書房）において，第一次共産党の主要な部分を占め，解党後は「政治的自由の獲得」を指導精神とする政治研究会の結成へと向かった，猪俣津南雄・鈴木茂三郎のグループの存在を分析した。

平林は，岩村氏も指摘するように　第一次共産党下にあっては猪俣の細胞に属し，大正12年4月に早稲田大学の講師に就任したのも，このグループとの関係が考えられるという。

さらに，大正13年6月の政治研究会の創立大会に際し，平林は二十四名の調査委員の一人に選任されており，[25] 政治研究会の「労働者階級の当面の政治的要求が直接に社会主義的なものでなくて，ブルジョア・デモクラシーの原則である」[26]という主張も，大震災後，日本の自由主義の再検討に向かったという平林にふさわしいといえる。

平林は，おそらく，政治的には，この猪俣・鈴木グループにきわめて近いところにいたと考えられる。平林自身の次のような回想は，この推測を根拠づけるだろう。関東大震災は，「各種の無産階級運動にデツス・ブローを与へた。」しかし，

> 無産階級運動はそれきりでペシヤンコになるものではない。折から起つたブルジョア政党の普通選挙運動に呼応して，合法的政治運動の旗幟をかゝげ，無産階級の統一的政党を促進するための運動が，猛然として起り，散乱してゐた左翼分子を政治研究会に結成せしめた。（「プロレタリア文学運動の理論的及び実践的展開の過程」『社会科学』昭和3年4月，『全集』中巻　692頁）

第一次共産党が解体した後，そこから様々な運動が派生したが，そのいずれに属したとしても，「リベツ化」とか「解党派」とか「転向」といった批難の言葉をあびせられるいわれはまったくない。

しかし，いずれにしても，大正12年という時点では，社会に対する認識に関していえば，平林には，「転向」といわれるような事実は一切なかったということが確認されれば十分である。

関東大震災が，平林の社会に対する認識に，とくに重大な変化を強いた事実はない。大震災後に平林が発表した最初の著書，大正13年4月刊『日本自由主義発達史』のモチーフは，渡辺正彦氏も指摘するように，[27] 大震災以前に書かれた最後の論文「新聞の社会的機能」（既出）に示された，「考古学の国家」日本という認識を引きつぐものであった。

しかも，『日本自由主義発達史』の「序」によれば，この書の内容は「昨秋第一高学校の一部の学生の研究会でした講演の草稿を補足したもの」であるという。とすれば，平林は，大震災以前にあたためていたアイデアを，震災直後，或いは少くとも10月中（秋！）までに，既に一つの論文にまとめ上げる作業に着手していたことになる。

社会に対する認識での，こうした一貫した道行きと比較して，文学の領域では，平林は，大震災の約三ケ月前，有島武郎の死に直面して，それまでの立場を清算し，新しい出発をなした。この時期，平林が何らかの「懐疑」に捉えられているように見えたとすれば，それは，その後一貫して彼が追究することになる，「文学が完全に政治のヘゲモニーの下に立ちながら，文学本来の美しさを保持するにはどうするかといふ問題」（「マルクス主義文学の本質」『祖国』昭和4年9月，『全集』中巻6頁）を，この時にはじめて自覚し，その解決に向かって模索を開始したということを示すものである。

（昭和59年9月1日受理）

註

1）もともとこの言葉は，鈴木茂三郎が，リベラリズムの運動を皮肉って，リベラルとオベッカを組みあわせて作った造語であった。岩村登志夫『コミンテルンと日本共産党の成立』（昭和52年，三一書房）211頁参照。

2）註23）参照。

3）一般に平林初之輔の「転向」といわれている。

4）平林は，また，『解放』大正12年2月号で，「『華族の邸宅地開放』に対する批判」というアンケートに答えて，「邸宅を売り払つたり，貸したりするのは，より有効に搾取するためです。」としながら，「有島さんのやうな人は別のやうですが。」と書いている。（135頁）

5）平林は，この新学芸講座に『科学概論』以外に二冊執筆している。一つは大正11年9月刊『近世社会思想』，他は大正12年2月刊『生物学概論』である。後者は，ニーダムの『生物学概論』を五分の一に圧縮しただけのものだが，前者は，平林のマルクス主義研究の成果をうかがわせるに足るものとなっている。

6）ここに示された考え方は，ほとんどポアンカレの『科学の価値』「第三部　科学の客観的価値」に依拠している。しかし，それが単にポアンカレの紹介にとどまらず平林自身の発想になっていたことは，例えば平林のマルクス理解などにはっきりとあらわれている。

7）拙稿「平林初之輔と「転向」――池田浩士氏の所論にふれて」（『哲学と教育』30，昭和57年）参照。

8）平林にとって，科学とは，社会に関するかぎり，マルクス主義のことであった。平林は「唯物論の最近における発展」（昭和4年）で，「近代的唯物論」＝マルクス主義とは「経験科学の研究の結果が与へる総合的世界観」であり，「「科学的世界観」の別名」に他ならないと述べている。（『全集』中巻 485頁）

9）「芸術の形式としての小説と映画」（昭和5年9月）「芸術に於ける Reality について」（同）など。

10）木村は，平林が「ロマンチツク時代」（大正9年3月）に関して宮島新三郎に批判されたとき，敢然と立って平林を弁護した。拙稿「平林初之輔とその時代(2)・大正9年」（『愛知教育大学研究報告』第32輯（人文科学）昭和58年）参照。

11）平林は，大正10年2月，『新文学』の「時評」において，芸術については「各人各様の見解」が許されるから，「社会正義」を「芸術批評の原理」とする根拠があると論じている。（『全集』下巻　79頁）拙稿「平林初之輔とその時代(3)――プロレタリア文学論への道」（『愛知教育大学研究報告』第33輯（人文科学）昭和59年）参照。

12）平林は，大正9年9月号『文章世界』所載の「文学革命の意義」で自然主義のリアリズムを越える新しい文学の出現を待望している。前掲拙稿「平林初之輔とその時代(2)」参照。

13）後年の「政治的価値」と「芸術的価値」の二元論的発想が既にこの時点で登場していることに注目すべきであるが，プロレタリア文学論の時期（大正10年3月～12年5月）で一元化されたが，最初期の文芸時評においては，「文学」と「社会」の二元論が平林においてはっきりと自覚されていたことを忘れてはならない。拙稿「平林初之輔とその時代(1)・大正7年8月」（『愛知教育大学研究報告』第31輯（人文科学）昭和57年）参照。

14）この「社会進化論」という用語だけをとりあげて平林のマルクス理解を云々するのは早計である。河上肇の『唯物史観研究』（大正10年刊）にも「社会組織進化論」（『河上肇全集』第11巻21頁，昭和58年，岩波書店）の用語が見える。この場合，「進化」の語はほとんど「進歩」の意で使われていると見てよい。問題は，社会進化論という概念が，社会の進化と生物の進化を混同するところにあり，平林は，ここで両者の区別から出発しているのであり，社会進化論にまつわる誤解はまったくない。

15）前掲拙稿「平林初之輔とその時代・(2)」参照。

16）青野季吉は，「コムレードの芸術」（『芸術戦線』大正11年10月）で，ブルジョアの個人主義にかわるプロレタリアの精神として，ゾンバルトの「場末の屋根裏が空虚になればなるほど，共同集合の新中心が魅惑的になり，孤立荒廃せる自個が，新らしい人間になつた事を感ずる。「個人」が消滅して，その代りに「コムレード」が現われる。階級の集団，共同労働の慣習，共同の享楽が生長する。プロレタリアの心理はここにある。」という言葉を引いている。（『日本プロレタリア文学大系』第1巻　354～5頁，昭和30年，三一書房）青野は，さらに，この問題を「芸術の革命と革命の芸術」で再説し，具体的に「革命的精神」「非個人主義的精神」「世界主義的精神」の三つを挙げている。（『解放』大正12年3月号，28頁）

17）山川の「無産階級運動の方向転換」の中には「無産階級の前衛たる少数者は，資本主義の精神的支配から独立する為に，まづ思想的に徹底し純化した。それが為には前衛たる少数者は，本隊たる大衆を遥か後ろに残して進出した。（中略）そこで無産階級運動の第二歩は，是等の前衛たる少数者が，徹底し純化した思想を携へて，遥かの後方に残されてゐる大衆の中に，再び引き返へして来ることでなければならぬ。」という一節が見える。（『近代日本思大系19　山川均集』77頁，昭和51年，筑摩書房）

18）「平林初之輔論　〈懐疑〉への試行」（『現代文学研究叢書Ⅰ　プロレタリア文学研究』昭和41年芳賀書房）163～6頁

19）同　165頁

20）都市の美を描く新しい文学の創造は，平林の最初期からのテーマの一つであった。前掲拙稿「平林初之輔とその時代(1)」122頁及び同「平林初之輔と「転向」」10～11頁参照。

21）平林のプロレタリア文学論の成大集である『無産階級の文化』（大正12年1月刊）に収録された最も早い論文が「一九二一年三月」の日付をもつ「死の文学から生の文学へ」である。前掲拙稿「平林初之輔とその時代(3)」参照。

22）この座談会は三回にわたって連載され10月号の分は第三回目である。小牧近江は，他の二回には出席しているが，この第三回には欠席したようである。

23）飛鳥井氏が「秋」と言っているのは，「震災のあと」「戒厳令下にやっと世田谷の西原に集まり」（前掲『ある現代史――“種蒔く人”前後』102頁）という小牧の発言によるものと思われるが，再建会議が二回あったとは考えられないから，時期の接近している金子や青野の証言の方が正しいと考えるべきであろう。

24）この点については，岩村登志夫氏の指摘がある。（前掲『コミンテルンと日本共産党の成立』183～4頁参照）

25）友成三郎「政治研究会の運動と無産政党の方向」『解放』大正15年1月号　71頁。

26）小山弘健・小山仁示「日本の思想雑誌　大正社会主義の思想的分化」『思想』昭和38年4月号129頁。

27）「平林初之輔試論――そのⅠ　出発点の検討」（『日本近代文学』第15集，昭和46年10月）54頁参照。この論文は，他の多くの平林論が関東大震災前後に〈ブランク〉や〈変貌〉を見ているのに対し，連続性を求めようとしている。しかし，そこに示された「文学革命」というキー概念は，平林の社会に対する認識に接近しえないばかりでなく，平林の基本的な前提である「科学」と「文学」の二元論にも到達しえないうらみがある。